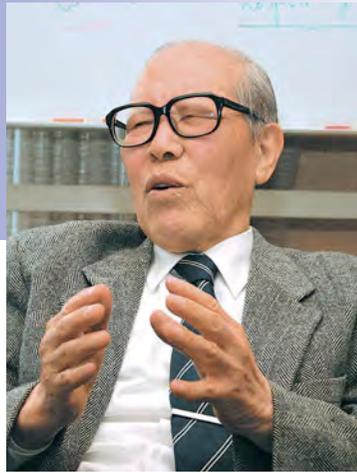


去る8月21日、大久保昌一名誉教授が88歳で亡くなりました。適塾記念会や大学広報にご尽力いただきました。心からご冥福をお祈りいたします。
(本記事は2007年2月号と4月号に掲載したものをリメイクして再掲しました)



大久保 昌一 先生

「都市も、教育も、絵も、人が原点」

「日本の住宅づくりには血が通っていない」とおっしゃる大久保名誉教授。専門は都市行政。工学部助教授から法学部教授・法学部長と転じた“変わり種教授”としても有名。

気晴らしに描く水彩画は、趣味の域を越えて個展を開くほどの腕前。まちづくりも教育もそして絵も共通するのは、人への思いやりと自然を大切にすること。その熱い思いをお話いただきました。

— 子ども頃のお話から伺います。

“文化果つるところ”(三重県北牟婁郡)で生まれ、中学まで過ごしました。小学校のときは喧嘩が一番でいわゆる番長的存在でした。しきたりや社会的慣習の枠にはまらなかった。価値観やものの考え方が人とは少し違っていたように思いますね。



ロンドン「フォーラム・ホテルの前庭」(1991)
※この前庭は、地域のアメニティに貢献していると言うことで表彰されている。

— これまでどんなお仕事を。

そんな自然環境で育ったこともあって、高校、大学(阪大工学部)で建築を学び、卒業して10年余り日本住宅公団(現独立行政法人都市再生機構)に勤めていました。そこでニュータウンのマスタープラン作りに参加しました。当時東洋一のニュータウンと言われた、香里団地、千里ニュータウン、平城ニュータウン、京阪奈学研都市の計画に携わりました。のちの話ですが、大阪大学では、吹田キャンパスのマスタープラン作りに参加しました。

— 大学に移られたきっかけは。

行政(役所)がつくる住居、まちというのは、画一的でしかも中央集権的な発想です。ウサギ小屋と揶揄されるゆえんです。住む人間の立場から考えてつくっていない。

僕が考えるまちや住まいには、人が楽しくのびのびと生活できるための人間的な過程を重視したアメニティーがまず必要です。僕はいつも“住宅は人権の基本である”と言っております。根本的な都市行政を訴えなあかんと思っていたときに阪大工学部に環境工学科ができることになり、仕事を変えました。



ピッツバーグ(1989)



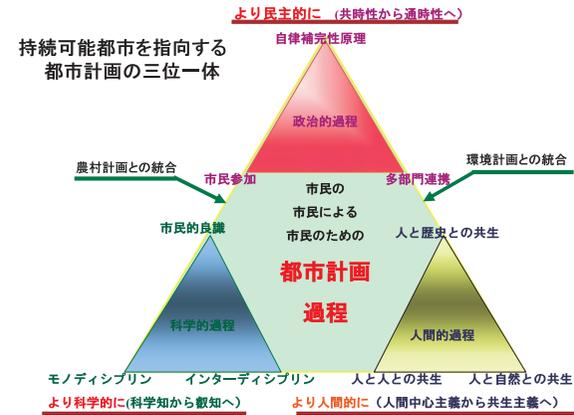
豊中キャンパス(2007)

— 反応はありましたか。

大阪市や吹田市はじめの方々に言いつづけているけど、あんまり変わらん(笑)。

— 先生の考えるまちづくり、住まいづくりをもう少し具体的に。

都市計画には、科学的過程(役人が図面を描き、その図面に従って建物を建てる)、人間的過程(人権や人格を尊重し快適に自由楽しく生活する)、政治的過程(住んでいる人が自ら考え、施策や計画づくりに参画する)の三つがあるのですが、後の二つが無視されています。都市政策は、土地政策、住宅政策、公共事業政策からなりますが、我が国の土地政策は無策というか逆の政策です。



住宅政策も極めて貧困、公共事業政策は産業インフラ中心で、生活インフラが軽視されているんです。

— 住む人も意識を変える必要があるのでは。

地元を大事にする、地域社会に感謝する気持ちが必要。欧米では、自分たちのまちを住み良くしたいという人たちがたくさんいる。現にピッツバーグなんかは製鉄産業で煤けたまちを市民運動で自然環境を取り戻し見違えるようなまちになった。子や孫の代まで考えて、いかに自然と調和した環境づくりをするか真剣に考えている。

— 大学も地域に貢献する精神が必要ですね。

法学部当時、山村雄一総長に「大学は立地している地域社会に感謝し、恩返しをしなければならない」と言いました。まだ中之島にもキャンパスがありましたから、大阪府知事をはじめ、大阪市、豊中市、吹田市などの市長さん達とどんどん交流を深めるように山村総長にお願いしたんです。

「大学の使命は、もちろん研究・教育の向上を図ること。特に研究成果を社会に還元する、地域のニーズに応えることが、すなわち日本への貢献に繋がるんだ」とこの「社会奉仕の精神」が、地域益が国益に繋がり、人類益に繋がるんです。

それと大阪大学も様々な長期的なビジョンを持つ必要性があることを進言しました。山村総長はさっそく「長期計画委員会」という委員会を作ったんです。同時にこの千里、北摂地域をバイオの拠点にしたらどうかと提言し、モノレールの延伸についても大阪府に陳情に行きました。今それが実現しています。

「都市も、教育も、絵も、人が原点」

— 「地域に生き世界に伸びる」という阪大のモットーはその当時にできたのですか？

医学部の和田博教授が委員長を務めた委員会の発案です。(注) 将来計画懇談会教育・研究体制専門委員会(和田博委員長)が、昭和56年11月にまとめた中間答申「地域に生き世界に伸びる—教育・研究体制の将来計画」が初出である。(評価・広報課調べ)

当時、私は山村総長に二つのことを進言しました。一つは実質的な意味での阪大の将来ビジョンを描くための将来計画懇談会のようなものをつくること。もう一つは大学の研究・教育というインテンションのペアとして、その成果を立地している地元還元するエクステンションを積極的に進めることです。山村総長は、早速、ビジョンづくりの委員会を立ち上げられました。そうした委員会の成果の一つが、「阪大のモットー」として掲げられている「地域に生き世界に伸びる」という言葉です。



— キャンパスにも先生が設計されたところがあるとか。豊中キャンパスの待兼山庭園、プロムナード(ともに1988年)、……などがあります。



開園当時の待兼山庭園

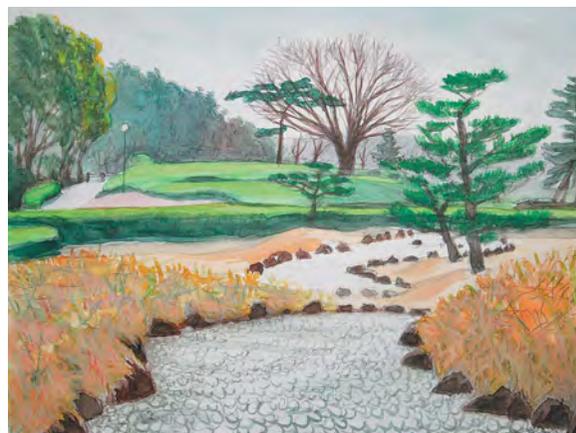
待兼山庭園は、上方から見おろすとよくわかるのですが、白州の川と松林、遠方の住宅街が調和するように設計してあります。プロムナードは、学生の憩いの場のつもりだったんですが、今は駐輪場になっているようです。

— そんな中での法学部への転身は異色と写りますが。

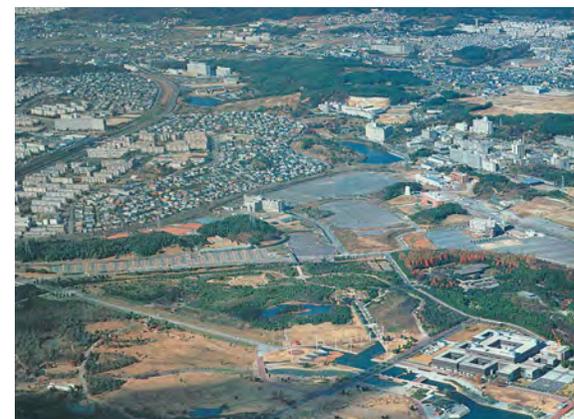
みなさんそうに言われるのですが、僕の中では工学も法律も同じ線につながっているんです。工学部で学んだことは「結果がよければすべてよし」という考え。法学部は逆にプロセスを大事にします。結果は二の次。言い換えれば工学部は器をつくること、法学部は中身を考えると。私の考える都市計画や住宅設計には、人間的な過程、人と自然との調和がその中心にあります。都市行政を進める上では工学的な要素に加えて人間的な配慮が欠かせません。この二つが合体して本当の都市、住居、環境の集合体ができ上がるわけです。

— つまり人が原点ということですね。

人と人とのつながり、つまりコミュニケーションができるかという視点でモノを考えることが大切です。それとまちづくりというのは、市民が自分たちの手で自分たちのために進めていくのが本来の姿であって、それを行政に実現させるための力として法律は大きなツールになります。ただ僕の場合は、法学部の前に不定冠詞の“a”が付くと書いてありますが(笑)。



待兼山庭園(2004年2月)



昭和50年半ばの吹田キャンパス(中央右手の茶色の建物が本部棟、右下は民博)

— 適塾についてお伺いします。

適塾が果たした一番大きな役割は緒方洪庵の「教育、人づくり」です。洪庵は学問の力量もさることながら教育者としての人格、医師としてのヒューマンイズムが卓抜した人でした。彼が実践した塾生への直接的指導、科学的思考法は教育の原点と言えるものです。そこに八重夫人のホスピタリティーが支えとなってすぐれた人材をたくさん生み出した。大坂という合理主義、自由主義を重んじる土地柄もよかったのですが、緒方洪庵と八重夫人の人間の魅力にひかれて日本中から多くの門下生が集まったということでしょう。

— 機関誌「適塾」の表紙絵を長年描かれていますね。

昔から適塾記念会の理事をしているということもあって、第18号(昭和60年)から描いています。医学部の伴忠康先生(故人)のあとを受けてずっと続けています。



待兼山庭園(2007年2月)



適塾記念会機関誌「適塾」No.38(左)、同No.39

— 絵はいつ頃から始められたのですか。

小学校の頃、手近にあった王様クレヨンで風景画をスケッチして、それがたまたまよかったのでしょう、学校からメダルがもらえた。それからです。今でも描きたくなくなったらずぐ描けるよう道具を持ち歩いています。絵心をそそる風景に出会えばすぐ絵筆をとります。30分もあれば描き上げます。絵を描くことは僕にとってのリフレッシュメントなんですよ。

— ところでお酒はやめられたとか。

医者になったら身体がボロボロですよと言われた。それできっぱりやめました。酒の上での失敗や笑い話もたくさんありましたが……。普通「失敗は成功の母」と言いますが、僕の場合は「失敗は次の失敗の母」になってしまふことが多かった(笑)。今は懐かしい思い出です。

(インタビュー：評価・広報課 松本 紀文)

大久保 昌一(おおくぼ・まさかず)

大正15年三重県生まれ。昭和28年大阪大学工学部建築工学科卒業。日本住宅公団(現独立行政法人都市再生機構)職員を経て、昭和44年6月大阪大学工学部助教授、昭和51年4月法学部教授、昭和60年4月法学部長、平成2年4月大阪大学名誉教授。
(財)大阪地域振興調査会会長、(社)大阪問題総合研究所理事長、豊中市政研究所理事長等を歴任、平成14年日本都市計画学会功績賞、平成15年日本計画行政学会論説賞等受賞、平成17年瑞宝中級章受賞。